

第4章 琵琶湖・淀川水質浄化研究所の成果報告

1. 生活環境保全対策・健康リスク問題に関わる調査検討

流域全体が取り組むべき課題、自治体を超えて解決することが効率的で有効な課題研究を対象に、行政が適切な施策を講じる上で有用となる調査研究によって、流域の水環境保全、さらに流域連携の推進に寄与することを目的に研究を進めている。

また、流域の水質・水環境情報や成果は機構のWEBに公開し、調査研究成果の情報や知見等は関係府県・機関の施策等に活用していただくため、評議員会、理事会、幹事会の他、研究助成成果報告会等の機会を利用して、提供に努めている。

(1) 琵琶湖・淀川流域の難分解性有機物に関する流域連携

① 目的

研究助成成果は、極めて重要であるが、内容が高度でありBYQを構成する流域自治体の関心が近年希薄傾向であることも考えられることから、流域の連携を図りさらに強化するために、また、流域関係機関や全国の手引きとなる内容を目指すことを目的として、平成27年度と平成28年度の2年間で「難分解性有機物」を取り上げた検討会を実施した。

② 研究概要

環境基準である「有機物(BOD・COD)」を対象に、各研究機関が取り組んできた難分解性有機物について勉強会を開始し、平成27年度は、琵琶湖・淀川流域や他の湖沼にて得られた難分解性有機物の知見や文献情報を収集整理し、内容構成の骨子案について検討した。平成28年度はその内容構成に基づき、流域全体の現在の実態把握や事例、生分解性試験の方法等について流域研究者間で検討を深め、モニタリングの調査手法や対策検討のために有効となる手引書(案)の作成を行った。

③ 結果および今後の展望

難分解性有機物の分析方法や対策、影響等に関する既往知見をわかりやすく整理し、体系的にとりまとめることができた。また、本書案で紹介する「標準的な生分解性試験方法」を用いた難分解性有機物の調査・測定を行うことで、さらなるデータの蓄積や流域内の他の結果との比較解析などが進み、より一層の難分解性有機物に関する知見の充実が期待され、これからの難分解性有機物の適切な対策・対処方法の検討や取り組みに活用されることが望まれる。

(2) 流域の水質保全のための流入汚濁負荷調査研究

① 目的

琵琶湖・淀川流域の水質保全のために、水質改善が進まない地域の汚濁負荷量や発生源の検討を行い、産官学連携で水質問題への解決を目指した共同研究の推進と実施を目的とする。

② 研究概要

木津川上流域では、浄水場でのカビ臭やトリハロメタン生成能の問題、木津川上流のダム群の富栄養化によるアオコ発生など、流域において水質保全の課題を抱えている。これら問題を検討するための基礎となる調査を様々な機関と連携で行い、流域一体となった水質保全に向けての取り組みを進める。平成28年度は流域における発生源の実態や流域特性などの探索的調査を実施している。

③ 結果および今後の展開

木津川環境基準点の家野橋でのモニタリングデータを勘案しながら、名張川における発生源の予測や起因となる可能性などを検討するために、今年度ははじめに数地点での濃度把握を行った。データ数が少ないためさらなるデータ収集が必要であるが、今後、調査地点、項目など研究の焦点を絞っていく予定である。